

## 既存地域資源のフル活用と新たな拠点づくり!! 市制施行70年目に佳境を迎える大型再開発事業

先人の築いた地域の基盤を  
持続可能な未来へつなぐために

広島県西端に位置し、市域北部が広島県  
廿日市市に、市域西部が山口県岩国市や  
和木町と接する大竹市（面積78・66km<sup>2</sup>、本  
年4月1日現在の人口2万5551人）が



中国地方でも有数の規模を誇る弥栄ダム（小瀬川上流）は桜の名所としても人気のスポットだ



山口県との県境にもなっている清流・小瀬川は「手すき和紙」を支える貴重な水資源

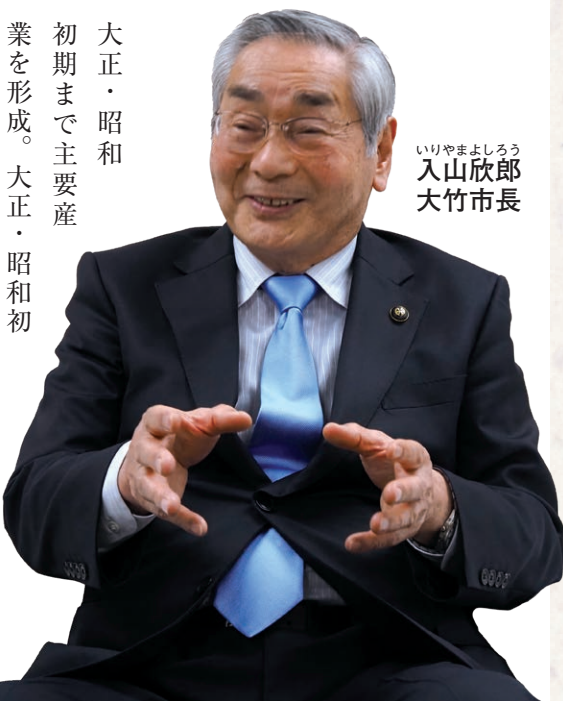
誕生したのは、昭和29（1954）年9月1  
日のことだ。

旧佐伯郡大竹町・小方町・玖波町・栗谷村、  
および松ヶ原地区（旧友和村の一部）の3町  
1村1地区の合併によるもので、大竹市は  
本年9月1日に、市制施行70周年の節目を  
迎える。

大竹市の中心的な市街地は、瀬戸内海に  
面する旧大竹町の大竹地区、旧小方町の小  
方地区、旧玖波町の玖波地区が市域東部の  
海側のエリアに集中している。旧三町の山  
側は中国山地などの山間部へとつながる  
傾斜地に位置しており、農耕や居住地に  
適した土地が非常に少ない。そのため、  
養蚕（および製糸業）や果樹栽培、和紙の  
材料になるコウゾの栽培などが、古くか  
ら行われてきた。

中でも、山口県との県境になっている清  
流・小瀬川沿いのエリアでは、江戸時代初  
期に興った製紙業（手すき和紙）が、明治・

いりやまよしろう  
入山欣郎  
大竹市長



大正・昭和

初期まで主要産

業を形成。大正・昭和初

期には販路を国内外に広げるなど

隆盛を誇った。産業としての製紙業の伝統

は現在、臨海工業地帯における近代製紙業

へと様変わりしている。だが、小瀬川流域・

防鹿地区の地元有志（おおたけ手すき和紙

保存会）を中心に、手すき和紙の技術も連

綿と継承されている。

海側のエリアには、JR山陽本線・大竹

駅や同・玖波駅、山陽自動車道と広島岩国

道路が交差し、現在建設が進行中の岩国大



紙・化学繊維・石油化学のプラントが林立する大竹地区の臨海工業地帯



400年以上の伝統技術を継承する「おおたけ手すき和紙保存会」の和紙作りの模様



ふるさと納税・返礼品でも大人気、レモンのかんきつ成分入りの餌で育てられる「あたたハマチtoレモン」

そう語る入山欣郎大竹市長は、生まれも育ちも大竹市だ。祖父の代（大正・昭和初期）には当時の家業「手すき和紙」販売のルートを大陸にまで拡大するなど、大竹市の産業構造や、地域の変遷をDNAレベルで把握できる環境下で、入山市長は成長

く、昭和40年代から始まり、広島県でも第1位の収穫量です。その養殖ハマチと、全国1位の生産量を誇る広島レモンとのコラボが生み出す《あたたハマチtoレモン》は、まさに『広島県海と山の1番』が合体した、最強の組み合わせといえるでしょう（笑）



竹道路も交差予定（詳細は後述）の大竹ジャンクション、広島岩国道路の大竹インターチェンジなどが、市街地の中心部に立地しており、岩国錦帯橋空港までも車で約20分の近さだ。

このように、交通環境に恵まれた大竹市の現在の主要産業は、山口県側の沿岸部を中心に大手企業の工場が集中する、製紙産業や石油化学関連産業などが担っている。

一方では、瀬戸内海での沿岸漁業、ならびに有人離島・阿多田島における《あたたハマチto

レモン》など、ブランド魚の養殖も盛んに行われ、観光業を含めた実に多彩な産業構造を有している。

『《あたたハマチtoレモン》』というのは、平成25（2013）年度から4年間をかけて養殖の研究開発をしたブランド・ハマチで、生産量が全国第1位の広島県産レモンを餌に混ぜながら育てています。

レモンに多く含まれるかんきつ成分（リモネン）の効果による、さっぱりとした風味や、みずみずしい身色が長く保たれるなど、良好な肉質が人気の《あたたハマチtoレモン》は、おかげさまでふるさと納税の返礼品としても、好評を頂いております。

大竹市におけるハマチ養殖の歴史は古

く、昭和44（1969）年に大学を卒業後、大手商社勤務や実家の家業である建設業などを経て、平成18（2006）年に実施された大竹市長選に初出馬し当選。本年で5期18年目を迎えている入山市長が、就任当時も現在も変わらずに抱く「市政（まちづくり）への強い思い」は、「先輩方の築いてくださった大竹市の良いところをさらに発展させてきた。

それだけに「耕地も少なく、昭和初期までは、これといった産業もない地域だった大竹市を、今日のような多彩な産業構造を持つまちに育て上げてきた先人、先輩の皆さまには、心からの敬意を感じざるを得ません」と、しみじみ述懐する。

昭和44（1969）年に大学を卒業後、大手商社勤務や実家の家業である建設業などを経て、平成18（2006）年に実施された大竹市長選に初出馬し当選。本年で5期18年目を迎えている入山市長が、就任当時も現在も変わらずに抱く「市政（まちづくり）への強い思い」は、「先輩方の築いてくださった大竹市の良いところをさらに発展さ

せ、少子化や人口減少などにも負けないまちづくりを実践すること。そして、いたずらに人口増を目指すよりも、地元で暮らし続けてくださっている市民のために、常により良い生活環境を追求し、持続可能なまちへの基盤を、次世代へとつなぐこと。それを大切にしたい」と明言する。

さらに、そんな「市政への強い思い」を、具体的なまちづくり計画として実現するため、平成29（2017）年3月に策定したのが《小方地区のまちづくり基本構想》（令和4/2022年11月に一部見直し）だ。

前述したように、大竹市の主要な市街地は山口県岩国市に隣接する大竹地区と、広



栗谷町地区・河和神社で150年前から奉納されている「谷和神楽」(市指定重要無形文化財)の担い手は若者たち(谷和神楽団)だ

島県廿日市市に隣接する玖波地区、その中間に位置する小方地区とで構成されている。この三つの地区において、J R大竹駅のある大竹地区と、J R玖波駅を持つ玖波地区に挟まれた小方地区は、鉄道駅がなかったせいも、市街地化が、大竹地区や玖波地区より比較的遅れてきた経緯がある。

《小方地区のまちづくり基本構想》は、地理的に大竹市の中心部に位置する小方地区に鉄道駅を誘致し、同地区を軸に、地域活性化を総合的に図ることによって「子育て世代が住みたいと感じるまちづくりの促進や、にぎわいの創出を図り、大竹市全体の魅力向上、ひいては持続可能なまちづくりにつながる《モデル地区づくり》のような意味合いを持つ施策」(入山市長)なのだ。

### 《小方地区のまちづくり基本構想》 実現がもたらす多様な効果

「小方地区に鉄道駅を誘致することは、旧小方町時代からの地元の悲願でした。正直なところ、現状ではJ Rも新駅の開設には慎重な姿勢で臨んでおり、必ず実現するかどうかといえば、今はまだ明確ではありません。しかし、戦後間もない頃に、現在の瀬戸内工業地域に発展する未来図などがまだ皆目分らない状況の中、私たちの先人は東京周辺や大阪周辺をはじめ、名だたる工業地帯などにも、何度も何度も足を運



平成24年度から運行を始めた《こいこいバス》は、これまでに利用者が100万人を超え、地域に愛される公共交通となっている

び、企業誘致を一つずつ粘り強く行い、ついに今日の瀬戸内工業地域の隆盛を実現しました。

その事例に倣って、新駅予定地周辺の小方地区全体のこれからのまちづくりを予定通りに着々と進めていき、鉄道駅を希求する市民や交流人口などの意識を盛り上げていけば、<sup>おの</sup>自ずと新駅の必要性に対する、J Rの理解も進むものと信じております。

実際、そうした新たなまちづくりを進めるのに不可欠な各種の優れた《環境》や《資質》などが、小方地区にはそろっていると自負しております」

# 大竹市

市 政 報

(広島県)

例えば、現在の市役所本庁舎からも近い丘の上に、「関ヶ原の戦い」の後、江戸時代最初期に、安芸国（現広島県全域）を領有することになった戦国武将・福島正則が築造した《亀居城》の跡（亀居公園）がある。

入山市長は、JRの新駅が実現した暁には「この亀居城址の麓に新駅を設置し、亀居城址を駅名にしたいですね。日本広しといえども、城跡を駅名にしている事例はないと思います。それに亀居城址を駅名にすれば、国内外のお城好きの方々が、一度は訪れてくださるのではないかとの思いもあります（笑）」とも語る。

「小方地区のまちづくり」の対象エリアは、小方地区の臨海部全域にわたっており、実に広大だ。例えば、代表的な事業地を挙げてみると、まず道の駅の実現を目指している「旧小方中学校跡地」、民間事業用地や中高層住宅用地として開発を予定している「旧小方小学校跡地」や隣接する「旧市民プール跡地」などを合わせたエリアは、総計4.7haある。

また、昨年3月にオープンした民間施設「下瀬美術館」の敷地面積も約4.6haだし、下瀬美術館に隣接している総合公園（晴海臨海公園、平成27/2015年球技場・管理棟、平成30/2018年大型遊具、令和2/2020年デイキャンプ場完成）に至っては、12.76haもの面積がある。

これらの事業地は市役所本庁舎から海側に

広がっているが、山側の前出・亀居城址の麓、「新駅設置予定地」の至近では《岩国大竹道路》（※大竹市小方から岩国市山手町まで延長9.8kmの幹線道路）の建設が進められており、取材時（本年2月22日）には、鉄筋コンクリート製の巨大な橋脚が、ニョキニョキと建てられつつある様子を目の当たりにすることができた。

先にも少し触れたが、この岩国大竹道路は大竹ジャンクションと連結することになっている。それによって、岩国市と大竹市を結ぶ既存の国道2号の朝夕のラッシュは、かなり軽減することが予測されており、この事業一つを取っても、小方地区ならびに大竹市全域の暮らしやすさは、より一層の向上が見込まれる。

こうした「小方地区のまちづくり」の計画エリアを、実際に進捗状況しんぱくじょうきょうを撮影しながら歩いてみると、今まさに「小方地区のまちづくりが、そこかしこ



医師が常駐する阿多田島唯一の医療機関「阿多田診療所」



小方小・中学校の高台への移転・統合で誕生した市立小方学園（小中一貫校）

「小方地区のまちづくりを構想するに当たっては、同地区に立地していた小方小学校と小方中学校の移転、および小中一貫校化（市立小方学園に統合、平成25年移転改築完成）の推進



早期の完成が期待される岩国大竹道路の建設現場

進は、外せない事業でした。大竹市は中山間地の地区だけでなく、海側の大竹地区・小方地区・玖波地区も含め、全体に平地が少ないのです。

そこで山側の土地を切り崩して平地を構築し、そこに小方小・中学校を移転統合させました。併せて、その周辺に170戸分の住宅地を開発しました。小方小・中学校の跡地にも、道の駅や中高層住宅などを計画していますが、開発には、小方地区のまちづくりの『将来性』に、民間企業が敏感に呼応してくれると信じています」

実際問題、例えばどのように広大な空閑地があったとしても、その場所の開発に民間企業の進出したいという意欲をかき立てることができなければ、新たなにぎわいの創出は難しいだろう。

しかし、鉄道新駅の設置実現の可否こそ、まだ明確ではないとしても、小方地区のまちづくりは空閑地を生み出すそばから、住宅開発や企業立地が相前後して進捗していくという「勢い」が、現状として早くも備わりつつある。

## 既に枝葉が生き生き伸び始めている 小方地区のまちづくり

中でも、民間企業の進出という枠組みから、いろいろな意味で突出した存在感を放っている《下瀬美術館》の在り方は、小方地区

のまちづくりを「文化芸術」の側面からけん引するものとして、大いに注目される。

「下瀬美術館の設立は、広島県のご紹介によって誘致することのできた事業です。世界的な建築家・坂茂さんが設計された下瀬美術館は、芸術作品を鑑賞するためだけの美術館ではありません。芸術作品を展示している建物そのものが、芸術作品なのです。さらに敷地内には芸術的な意匠に彩られた宿泊施設（ヴィラ）も点在しており、高品位のフレンチレストランもあります。

下瀬美術館はオープンしてまだ1年ですが、早くも小方地区のランドマークとなっており、国内外から芸術ファンや観光客の皆さんが訪れてくれるようになりました。本当にありがたいことです」

下瀬美術館内のヴィラは計10棟。コンセプトは「海辺の建築作品に泊まる」。世界的建築家・坂茂氏が、下瀬美術館の芸術的空間と美術館が立地する大竹市臨海部の風光明媚な環境を生かし設計した、個性的な建物ばかりであるところが特徴的だ。

そして、ある方面から伝え聞いたところによると、小方地区に進出する際、大竹市と折衝する過程において、観光地としての大竹市の弱点である「宿泊施設の少なさ」を知った美術館側が、新たなコンセプトの一つとして数々の個性的なヴィラを企画し、建設を依頼した、ともされる。

ここで大事なのは、「アート（美術館の建



「下瀬美術館」が醸し出す文化・芸術の香り高い雰囲気は今や「小方地区のまちづくり」にも不可欠な地域財産になっている

物やヴィラ、各種のコンセプトを投影した庭園など）の中でアート（展示される絵画や彫刻ほかの作品）を観る」ともいわれるほどの「高感度ぶり」に定評のある下瀬美術館が、瀬戸内海を目の前に展開する小方地区の環境の多様性に、既に溶け込んだ存在になっていることだろう。もつといえ、新たなまちづくりの進む小方地区において、地域の伸びゆく姿に呼応しながら、自らも進化しようとしている高感度な下瀬美術館の在り方は、とてもよく似合っている。

ところで、今回の取材では、市長のお話

# 大竹市

(広島県)

市 政 ル ポ



小方～阿多田航路に就航したばかりの新型フェリー「悠風／はるかぜ」(阿多田港)



土日ともなると阿多田島は島の総人口以上の釣り客で大盛況になる

にもあった《あたたかハマチトレモン》の養殖などで知られる有人離島、阿多田島へも渡ることができた。晴海臨海公園に隣接する小方港から、阿多田島に渡ったのは市役所訪問の翌日、祝日のことだった。

阿多田島が釣り客に人気だということは聞いていたが、大竹市の第三セクター《有限会社阿多田島汽船》が運行する150人乗りの新型フェリー「悠風<sup>はるかぜ</sup>」(令和5/2023年就航、小方港～阿多田島航路の所要時間は約30分)は釣り客を中心に、まさに満席の盛況だった。

大竹市を代表する有人離島(令和5年6月の住民台帳に基づく人口236人)であると

「みんなが集いにぎわうまち」「地域の魅力が輝くまち」だ。そうした基本精神を具現化するための「小方地区のまちづくり」は、まさにこれからが佳境といえる。

しかし、例えば前出の下瀬美術館はオープンからわずか1年の間に、宿泊施設の少ない地元に美しいヴィラを整備しただけでなく、小瀬川流域の手すき和紙保存会とのコラボ企画による、手すき和紙作りのワークショップや、手すき和紙を使ったアート作品の展示などを通じ、地域の活性化に早くも貢献している。

小方地区のまちづくり構想の最大の核と

同時に、沿岸漁業・養殖漁業の島としても知られる阿多田島の地域活性化は、観光振興の奥行きを深くする存在として、小方地区のまちづくりとも密接に連動している。

令和5年に新型フェリーを就航(18年ぶり)させたのもその一環だが、フェリーの船室から遠望する「岩国大竹コンビナート」の工場群の様子は、まさに圧巻だった。今回は実際に見る機会を持てなかったが、「岩国大竹コンビナート」の「工場夜景」は近年、大竹観光の一つの目玉にもなっている。

阿多田島の活性化も含む「小方地区のまちづくり」の基本方針は「住み



大竹地区の沿岸部では大手企業の工場が集中し、臨海工業地帯を形成しているが、その工場夜景は今や観光資源の一つとなっている

位置付けられる「鉄道新駅の建設計画」が今後どうなるかとは別の部分で、地域活性化の生き生きとした息吹は、事業の進捗とともに、既に枝葉を生き生き伸ばし始めている。今後の推移が大いに期待されるゆえんだ。

(写真・文)遠藤隆/取材日:令和6年2月22日